

シビ王の物語に登場するインドラ

——鳩と同じ重さの人肉を賠償として要求——

侯 巧 紅*

はじめに

仏教を広めるためにインドでサンスクリットで書かれた説話は、中国にも数多く伝わり、古典中国語に翻訳された。この論文では多くの説話の中からシビ（尸毘/Sibi）という名の王が登場する仏教説話¹⁾を取り上げることにする。

鷹に追いかけて逃げ込んで来た鳩をシビ王は自分の身体を犠牲にしても庇おうとする。鳩を渡すのが嫌なら同量の肉を寄越せと要求する鷹の言いなりに、シビ王は自分の身体を差し出すのである。この鷹の正体は神々の国の皇帝インドラ（釋提恒因/indra）²⁾であり、鳩の正体はヴィシュヴァカルマン（毘首羯磨/visvakarman）³⁾であった。インドラはヴィシュヴァカルマンに協力させて、ブッダになろうとするシビ王の志が本物であるかどうか試そうとしていたのである。

インドから伝来して古典中国語に翻訳された仏教の文献の中に残されているだけでなく、このシビ王の物語はいろんな形で中国に痕跡が残っている。古来より伝わる中国各地の壁画の中に残存するし、さらには中国のチ

* 本学大学院文学研究科博士前期課程修了

キーワード: シビ王, インドラ, 人肉による賠償, 真実の陳述, 大智度論, 六度集經

ベトナム地域の葬式にも跡を留めているのである。

そして、シビ王の物語は今も中国で民衆の間でよく知られている。一昨年夏の夏に故郷の河南省に帰った際にいろいろな人に会って尋ねてみたが、その多くはシビ王の話を知っていた。この人たちは出典などを知らず、子供の時に誰かから聞いたという。中国ではまだ説話伝承の文化が生きているのである。

この話の中核モチーフ「同じ重さの人肉による賠償」は、インドと中国だけではなく世界中にさまざまな形で拡散している。インドではいくつかの説話に痕跡が見られ⁴⁾、中国の読み物⁵⁾や朝鮮では民話⁶⁾に名残を留め、日本の江戸時代に読まれた小話⁷⁾にまで及んでいる。西洋では中世の文学⁸⁾以来このモチーフの例は数え切れず、最もよく知られているのはシェイクスピアの『ヴェニス商人』⁹⁾である。さらには、トルコやノルウェイに伝わる民話にまで、このモチーフが見られる¹⁰⁾。

第一節 シビ王の物語を伝える中国語文献

シビ王の物語を伝える文献は、中国に数多く知られているが、ここではまず『大智度論』にある話¹¹⁾を紹介する。この『大智度論』はインド文献を鳩摩羅什¹²⁾が405年に中国語に訳したと言われているが、この文献はインドでは名前さえ知られていない。鳩摩羅什が中国語で執筆したものかも知れない。

『大智度論』に伝えられる物語で、シビ王は「ブツダになるために欠かせない実践項目」(波羅蜜/*pāramitā*)¹³⁾に異常に熱心な人物として紹介される。シビ王がひどく熱中していると言われるのは、「物を与えること」(布施)、「生き物殺しや盗みなどをしないという戒めを守って、正しい生活態度をとること」(持戒)、「精神を集中すること」(禪定)、「最高度の洞察力を身につけること」(知恵)の四項目である。もしこの噂が本当なら、

シビ王の物語に登場するインドラ

シビ王はいつか必ずブッダになるのは間違いないということになる。

ブッダは前世でシビという王であった。この王は既にブッダになる決心をしていた。そして、ブッダになるという大きな目標を達成するために、非常に努力を重ねていった。彼は慈悲の心が深く、一切の生きとし生けるものに対して、あたかも母がその子を愛するが如くに接していた。

さて、その頃の世界にはまだブッダが存在していなかった。その時、諸天の主であるインドラはこの世にいつかブッダが出現することを強く望んでいたが、自分の寿命が尽き果てそうになった時、ブッダになるものがまだ見つからないので、苦しい思いをしていた。地上に降りて探してみても、そういうものは見つからず、失望して天上に帰った。

その時、ヴィシュヴァカルマンはインドラががっかりしているのを知って、ブッダ候補者としてシビ王を推薦した。この王は「ブッダになるために欠かせない実践項目」（波羅蜜）を行うのにひどく熱心なので、将来必ずブッダになるだろうというのである。ヴィシュヴァカルマンが熱心に誉めるので、インドラはその王の所へ行くことにした。

巧みに姿を変えることができるヴィシュヴァカルマンは、自分の身体を鳩に変え、インドラの身体を鷹に変え、シビ王の所へ行った。こうして、鳩に化けたヴィシュヴァカルマンと鷹に化けたインドラはシビ王の所へ飛んで行った。鷹に追いかけられた鳩が逃げ込むという場面を演出しようとしたのである。

こうして彼らは、鳩は鷹に追いかけて恐怖に脅える様子を装い、鳩はシビ王の腋の下に助けを求めて飛び込んだ。シビ王は逃げ込んだ鳩を受け入れた。そこで、追いかけていた鷹は「鳩を返せ」

とシビ王に要求する。しかしながら、鳩を守ろうとするシビ王は、「生きとし生けるものを受け入れて希望を叶えてやるのだ」と言って、鷹の要求を拒否する。

これに対して鷹は抗議をする。「私も一切の生きとし生けるものの一員ではないか。鳩は私の食べ物である。なぜ私の食べ物を奪うのか」と言う。そこでシビ王は、鳩の肉の代わりに自分の肉を与えることにした。

鷹はここで条件をつけて、「鳩と同じ重さの肉を切り取れ」と言う。そこでシビ王は秤を持って来させて、その一方の端に鳩を乗せ、もう一方に股から切り取った自分の肉を乗せた。すると秤が鳩の方に傾いたので、もっと肉を切り取って、追加しなければならなかった。ところがいくら追加しても、秤はやはり鳩の方に傾くので、シビ王はさらに自分の肉を加えなければならなかった。何回シビ王が肉を追加しても、やはり鳩の方が重いのである。最後にシビ王は血まみれの全身を秤に乗せることになった。

ここで鷹は「そんなことをして後悔しないか」とシビ王に聞く。これに対してシビ王は「ブツダになる決心をしたことに後悔はない」と答える。この言葉に大地は六度震えた。嘘偽りのない言葉が発せられることによって、シビ王がブツダになることに疑いの余地がなくなったのである。

インドラとヴィシュヴァカルマンは、シビ王の「真実の陳述」を聞いて感動し、シビ王に礼拝した。そしてシビ王の身体は「真実の陳述」のお陰で元通りになる。インドラはシビ王が必ずブツダになると確信して、ヴィシュヴァカルマンと共に天上に帰った。

シビ王の物語を研究する際に取り上げるべき資料として、『大智度論』と並んで重要なのは『六度集經』¹⁴⁾ である。三国時代の呉の康僧會が250

シビ王の物語に登場するインドラ

年から281年までに訳したと伝えられ、中国語訳仏典の中で最も古い層に属する。「六度」とは「六波羅蜜」とも言い、ブッダになるために実践すべき六つの項目のことである。『六度集經』の序文によると、あるブッダ候補者（菩薩/bodhisattva）がブッダの教えを伝えようとして、次の6項目を挙げている¹⁵⁾。①「物を与えること」(dāna/布施)，②「戒めを守って正しい生活態度をとること」(śīla/持戒)，③「不当な仕打ちに我慢すること」(ksānti/忍辱)，④「苦難にめげず善い行いに励むこと」(vīrya/精進)，⑤「精神を集中すること」(dhyāna/禪定)，⑥「最高度の洞察力を身につけること」(prajñā/明)。

『六度集經』では、各項目ごとに関連する説話が集められ、シビ王の物語はその第一巻の「布施無極章」に見え、「物を与えること」の究極形態、生命を与える話を集めた章に採用されている¹⁶⁾。他の文献に伝えられるシビ王本生譚と違って、物語の主人公の名前がシビではなく「サルヴァダッタ」(sarvadatta)となっている。しかしながら話の大筋は同じで、鳩のために王が自分の身を切り取る話に外ならない。

シビ王物語を詳細に研究する手掛かりとして、ここでは『大智度論』の話と『六度集經』の話と比較して、物語展開の違いを検討する。また『大莊嚴論經』¹⁷⁾の話は、極めて重要な箇所です。『大智度論』の話と同じ展開を見せながら、描写がずっと詳しいので、細部を検討する際に役立てることができる。

第二節 ブッダの出現を期待するインドラと自分の 地位喪失を恐れるインドラ

『大智度論』と『六度集經』がそれぞれ伝えるシビ王の物語を比べると、重要な点で異なっていることが分かる。まず、インドラがシビ王を試す意図が違う。『大智度論』の要約で示したように、インドラは将来ブッダが

出現することを強く望んでいて、自分の命が尽きる前に誰かが必ずブッダになると確信を持ちたいと思っているのである¹⁸⁾。ブッダになれそうな候補者として、ヴィシュヴァカルマンはシビ王を推薦し¹⁹⁾、それを聞いたインドラは、自分の目で見てそのことを確信したいと考える²⁰⁾。そこで自分がシビ王の所へ行ってテストを試みようとする。そしてテストは成功し、シビ王はブッダになるために自分の身体を棄てる覚悟でいることを行動で示し、自分の言葉でこの旨を伝える。

ところが、『六度集經』に登場するインドラが気にしているのは、「将来ブッダが出現する可能性」ではなく、「自分の地位が脅かされる可能性」である²¹⁾。誰かがインドラになろうとして頑張っているのではないかと恐れているのである。『六度集經』のインドラがシビ王を試すのは、王がブッダになることを確信するためではなく、王がインドラになるつもりがないことを確信するためである。

この世で最も困難なことはブッダになることである。そしてその次に困難なのは神々の王インドラになることである。仏教では「行い」(業/karman)はいつか必ず「報い」(果/phala)となって現れる。最も困難な「報い」を得るには、最も困難な「行い」をしなければならない。

ところで、インドラは非常に熱心に困難な「行い」をしているシビ王のことを話に聞いた。このシビ王が目指しているのは、最も困難な目標か二番目に困難な目標かに違いない。ブッダになろうとしているのかインドラになろうとしているのかどちらかである。もしシビ王がインドラになろうとしているのなら、インドラは大いに困る。シビ王がインドラになると、今のインドラは地位を失うからである。そこでインドラは、シビ王がインドラになろうとしているのではないことを確信するためにテストをするのである。

インドラが試してみると、シビ王は自分の肉をすべて提供しようとする

シビ王の物語に登場するインドラ

のであるから、「惜しみなく与えること」を最高度水準で実践しているの
であり、目指しているのがブッダになることであることに間違いがない。
すなわちインドラになろうとしているのではないことが疑問の余地なく明
らかになった。そして、このことをシビ王が改めて言葉で述べる²²⁾。これ
ですっかり安心したインドラは、安心して天上に帰る。

第三節 鳩の肉をめぐる鷹とシビ王の駆け引き

『大智度論』によると、ヴィシュヴァカルマンは目が赤く足が赤い鳩に
姿を変え、インドラは鷹に姿を変えた。鷹は速い速度で鳩を追いかけた²³⁾。
鳩は直ちにシビ王の腋の下に逃げ込んで、大いに恐れおののく様子をし
た²⁴⁾。鷹は近くの木に止まってシビ王に話しかけた。「鳩を返せ。これは
私の受け取るべきものだ。」²⁵⁾

自分が先に捕まえようとしていたのを根拠に、鷹は鳩の所有権を主張す
るのである。ところが、これに対してシビ王は「鳩は私の方が先に受け入
れている」と反駁する²⁶⁾。これをきっかけに、鷹とシビ王との間に興味深
い論戦が展開される。

「大いに精進して慈悲心有る」シビ王は、誰も反対することができない
原則を持ち出して、「生きとし生ける者すべてを救いたい」と言って、鳩
の引き渡しを拒絶する²⁷⁾。これに対して、鷹は相手の持ち出した原則を逆
手にとって、「私も生きとし生ける者すべて〔のうち〕ではないか。なぜ私
だけには憐れみを示さず、今日の食事を奪うのか」と言う²⁸⁾。

そうすると、鷹を飢え死にさせるわけにもいかないのです、シビ王は「ど
んな肉が欲しいのか」と尋ねる²⁹⁾。鷹は「殺したばかりの新しい肉を私
は食う」と言う³⁰⁾。ここまで追い込まれたシビ王は、自分の肉を切り裂い
て鷹に与えるしかなくなり、刀で自分の股の肉を切り裂いて与える³¹⁾。

こうして、鳩の命を守り同時に鷹の食糧を賠償しなければならなくなっ

たシビ王は、鳩の代わりに自分の肉を差し出すことになったわけである。ここで鷹は同量賠償の原則を持ち出す。「私に同じ重さの肉を得させよ」と言うのである³²⁾。そこで王は秤を持って来るように命じた³³⁾。

第四節 血まみれで秤に乗るシビ王

鷹は鳩と同じ重さの肉を王から要求するが、これに応じて王は自分の肉を切り取って秤に乗せる。ところが、いくら肉片を加えても、鳩の重さと釣り合わない。とうとう王は血まみれになって全身を秤に乗せようとする³⁴⁾。これに続く場面の違いは興味深く、そこで鷹に化けたインドラが示す反応について、『大智度論』と『六度集經』とを比較したいと思う。

秤に乗る場面とそれに続く場面を見ると、同じ鳩摩羅什が訳した『大莊嚴論經』は『大智度論』の話と展開が同じであり、しかも遥かに詳しい。『大莊嚴論經』の話では、秤に乗る場面が続く場面の描写が詳しいからである。『大莊嚴論經』にも『大智度論』にも同じように描かれているが、『大莊嚴論經』の方が詳しいので、インドラの化けた鷹の反応が分かりやすい。そこで、この辺の物語展開について『六度集經』と比較する際には、『大莊嚴論經』を使う方が問題点を把握しやすい。

『大智度論』/『大莊嚴論經』で語られている物語によると、血まみれの王が秤に乗ると、大地は震動して天で神々が感嘆の声を上げる³⁵⁾。そして、鷹に姿を変えたインドラはシビ王の「決意」を確認した。これで、シビ王の意図が分かったのであるから、インドラが王を試す目的は達成されたのである。ただし、これに続いてもう一つ場面が設定されていて、正式な手続きに則って、破壊されていたシビ王の身体が元通りになり、王がブツダになるつもりでいることが改めて証明される。

これと違って『六度集經』で語られている物語によると、サルヴァダッタ王の「決意」について、鷹に化けたインドラはすぐに信じない。そして、

シビ王の物語に登場するインドラ

これ程の苦痛を忍ぶ王にさらに質問を浴びせる。王が身体を棄てようとしても、鷹の姿をとるインドラにはまだ確信が生じないのである。それどころか、まだ疑いが消えていないので、血まみれの王に質問するのである³⁶⁾。

『大智度論』/『大莊嚴論經』の話でもシビ王を質問攻めにする場面はあるのだが、それが不思議なことに、インドラが納得した後のことである。シビ王が秤に乗って神々が感嘆の声を挙げると、鷹に化けたインドラは直ちにシビ王の意図を理解し、王がブッダになるつもりであると信じる³⁷⁾。これでインドラはすっかり満足したはずである。ところが話はここで終わらず、ヴィシュヴァカルマンの発言をきっかけに、鷹に化けたインドラはシビ王に質問する³⁸⁾。

第五節 王の身体を回復する手段:「真実の陳述」か「神力」か

シビ王の意図を試すというインドラの都合とは別に、物語の展開の上で避けられない問題がここにある。それはシビ王の身体をどうするかという問題である。インドラが目的を達したからといって、血まみれになって死にかけているシビ王を放置したまま、インドラとヴィシュヴァカルマンは、満足して天国へ帰るわけにはいかないのである。

そこで、「シビ王の身体を回復する場面」が物語の展開の上で不可欠となるが、その場面を導入するために、「インドラがシビ王に質問する場面」を設けざるをえなかったのである。物語を無理なく展開させて話を終わらせるために、この場面はぜひとも必要であった。

何度も肉を切り取って、シビ王の身体は細切れになっている。これを元通りにする方法として『大智度論』で採られているのは、神々の超能力という簡便な手法ではなく、「真実の陳述」という伝統的な手法である。シビ王はインドラに答えて、A「私は身体が壊れたことを後悔していない。[このような生き方をして、]ブッダになるつもりである。」B「私の言葉

に偽りがなければ、身体が元通りになるように」と言った。この言葉は発せられると、直ちにシビ王の身体は元通りになった³⁹⁾。

ヴェーダ時代以来のインドでは、「真実」(satya) が重んじられ、「真実」そのものに超自然力が宿ると信じられていた。そして「真実の陳述」(satya-vacana) は数多くの文学作品の中でモチーフとして用いられた⁴⁰⁾。『大莊嚴論經』のシビ王の話について言えば、王自身が「私は身体が壊れたことを後悔していない。[このような生き方をして、] 私はブッダになるつもりである」という言葉を口にすると、この真実の言葉に宿る超自然力が発動して、ばらばらになった身体が一瞬にして元通りになるという超大奇跡が実現するのである。

こうして、シビ王が行った「真実の陳述」は効力を発して、ばらばらになっていた身体の断片は見事に繋がって元通りになった。そして、この「真実の陳述」の効果はそれだけではない。身体の完全回復という奇跡が起こったという事実は、シビ王の言葉が真実であったからである。そうすると、「真実の陳述」が功を奏して王の身体が回復したということは、王の言葉が真実であることの証左となる。インドラが求めていたシビ王の真意は、いよいよ疑う余地のないものとなったのである。

さて、『大智度論』のシビ王と同じように、『六度集經』のサルヴァダッタ王は、「私の身体を回復して欲しい」と言う。しかしながら、『大智度論』のシビ王と違って、この「私の身体を回復して欲しい」という言葉は、「私はブッダになるつもりである」という言葉とは違った文脈で発せられる。

インドラの計画に乗せられて、『六度集經』のサルヴァダッタ王は、身体をすっかり壊されてしまった。これでは、インドラが課した試験には合格したとしても、自分自身のやっていることは続けられない。身体を失っては、「他人に物を与えること」(布施)を行えないからである。そこでサ

シビ王の物語に登場するインドラ

ルヴァダッタ王は、インドラに向かって「私の身体を回復して欲しい」と言う⁴¹⁾。

この話に登場するサルヴァダッタ王は、いわば「他人に物を与えること」の専門家であり、これを実行するためには身体が不可欠である。しかもブツダになろうという最高の目的を目指して「他人に物を与えること」を実践しようとしている。したがって、自分の身体を犠牲にするのも厭わないほど、「他人に物を与えること」を最も極端な形で行おうとするのである。

『六度集経』のサルヴァダッタ王は、インドラに身体を壊されて、「他人に物を与えること」の続行を妨害された。ブツダになる準備ができなくなったのである。そこで、害を加えた側に元通りにするように求めて、「私の身体を回復して欲しい」と言うのである。この求めに応じて、加害者のインドラは、サルヴァダッタ王の身体を原状回復するのに「天醫神薬」を用いる⁴²⁾。神の住む国の医術を用い、神々の使う薬を使うのであるから、たとえばばらばらになっていても、身体はたちどころに元通りになり、以後もサルヴァダッタ王は「他人に物を与えること」を続けることができる。

ところが、『大智度論』系統の文献に採録されている話では、王がブツダになる決心をしていることを疑いの余地なく示すことがすべてに優先される。そこで念入りに描かれるのが、伝統的なモチーフ「真実の陳述」の場面である。そして、「私の身体を回復して欲しい」という王の発言も、「真実の陳述」の場面を導入するきっかけとして、連続する文脈の中で出される。

これと対照的なのが『六度集経』のサルヴァダッタ王物語である。このヴァージョンでインドラが恐れるのは、誰かが自分の後釜を狙うことに尽きる⁴³⁾。サルヴァダッタ王がインドラになるつもりがないことさえ分かればよいのである。したがって、ブツダになるつもりであることを証明するために大袈裟な場面を設定する必要がない。サルヴァダッタ王が古来の手

順を踏んで「真実の陳述」を行う必要はないのである。

『大智度論』系統の文献（『賢愚經』⁴⁴⁾、『菩薩本生鬘論』⁴⁵⁾）には、ブッダになるつもりであることを確かめるために、さらに「悔いを巡る問答」が見られる。「他人に物を与えること」を極度に実践したせいで、王は身体が破滅するに至ったが、そのことを後悔してないと明言する場面である。そして、その直ぐ後に「真実の陳述」の場面が続くのである。『六度集經』のサルヴァダッタ王物語には、そのような場面連続は設定されていない。

第六節 王の身体回復をめぐる話し合い

『大智度論』に見られるシビ王の話では、末尾に近い所に興味深い場面が見られる。破壊されたシビ王の身体を元通りにする方法について、まずヴィシュヴァカルマンとインドラが話を交わす。ヴィシュヴァカルマンは「神力」を使うようにとインドラに勧めるが、インドラはこれに反対する。

ヴィシュヴァカルマン（インドラに）：あなたには「神力」があるので、それを使ってシビ王の身体を元通りにするのがよろしい。

インドラ（ヴィシュヴァカルマンに）：私はそれを使わない。この王はブッダになろうと自分で決心して、身体を破壊するようなことを喜んでしたのだ。

インドラ（シビ王に）：自分の肉を裂いて、心が苦しまないのか。

シビ王（インドラに）：私の心は苦しまず、大いに喜んでいます。

インドラ（シビ王に）：それをどうして信じることができようか⁴⁶⁾。

これを受けて、シビ王は決められた形式を踏んで「真実の陳述」を行った。すると、直ちにシビ王の身体は元通りになった。正式に「真実の陳述」が行われた結果、この「真実」に内在する超自然力が発動して奇跡を起こ

シビ王の物語に登場するインドラ

したのである。

王が秤に登ってブッダになる決心を宣言すると、世界中が歓喜の声を上げ、インドラも大いに感激する。シビ王の身体回復の方法について三人が話を交わす場面は、「歓喜の場面」に続いて描かれている。この「歓喜の場面」では、シビ王の未来について全世界が確信し、ブッダが出現することを信じて喜んでいる。

そうすると、インドラに残された仕事は、シビ王の身体を元に戻すことだけである。このことはインドラにとって簡単なことである。何しろ神々の王なのであるから、自分に宿る「神力」を使えば、どんな奇跡でも起こせるのである。これを考えれば、ヴィシュヴァカルマンの提案はもっともである。

ところが、インドラの超自然力を使うというヴィシュヴァカルマンの提案は、インドラの受け入れる所とならなかった。一見したところ不自然なこの状況設定は「真実の陳述」の場面に話を導くための伏線であり、ここでインドラに他意があるわけではない。「真実の陳述」の場面を設けるには、それに先立って諮問の場面がなければならない。ここでは「それをどうして信じることができようか」というインドラが王に向けて発した言葉がそれに当たる。

こうして、全世界とインドラがシビ王の決意を了解しているのに、いつか王がブッダになることを全ての人が確信しているのに、わざわざ「真実の陳述」の場面が設けられることになる。ブッダになる可能性の確認という究極の大問題ともなれば、それまでの話の展開はどうであろうと、定められた形式を踏んだ「真実の陳述」の場面を設けることは、仏教の説話伝承では望ましいこと、必要なこととされていたのである。

劇的な「歓喜の場面」の直後に、シビ王の身体を元に戻す方法について、ヴィシュヴァカルマンとインドラが意見を交わし、シビ王本人の気持ちも

徴され、一見したところ無駄な脱線のようにも思われるが、これは作者の不注意な間違いではなく、それなりに考えた上で設定されたものである。

このように、『大智度論』に見られるシビ王の話では、インドラがすでにシビ王の意図を知っていたにもかかわらず、「真実の陳述」が儀式として華々しく行われたのである。そして、「真実の陳述」を挙行することで話が終わるにもかかわらず、神の超自然力によって話を終わらせる可能性も話題にされているのである。

この点で対称的なのが『六度集經』に伝えられるサルヴァダッタ王の話である。この文献に登場するインドラが気にするのは、もっぱら自分自分の地位であり、ブッダが出現しようしまいとどうでもよい。サルヴァダッタ王がインドラになるつもりがないことさえ分かれば、それでインドラの目的はすっかり達せられるのである。したがって、ブッダを目指していることを念には念を入れて一点の疑念もなく確認する必要はない。

秤の上に乗った死にかけの王が「ブッダになるつもりだ」と呟くのを聞くだけで十分であり、それに加えて正式に「真実の陳述」を大袈裟に挙行する必要などない。このように、『大智度論』など他の文献に伝えられるシビ王の話と比べると、『六度集經』に伝えられるサルヴァダッタ王の話の特異性は否定できないが、それなりに首尾一貫した物語展開を見せている。

お わ り に

『大智度論』のシビ王も『六度集經』のサルヴァダッタ王も、同じように「他人に物を与えること」に熱中していた。すざましいばかりに熱心なので、遥か遠い未来によほど高い目標を実現しようとしているに違いない。最も実現が困難な目標であるブッダを目指しているか、二番目に困難なインドラを目指しているかであろう。

シビ王の物語に登場するインドラ

王の真意を知りたいと思い、インドラは地上に降りてテストをしようとする。ところが、『大智度論』に登場する場合と『六度集經』に登場する場合とでは、インドラの動機がまるで異なる。『大智度論』のインドラが気にしているのは、今の世にブッダがいないことであり、いつかブッダが出現するという確証がないことである。ところが、『六度集經』のインドラが気にするのは、もっぱら自分の将来であり、いつか別の者がインドラになって自分が地位を失うのではあるまいかということである。『大智度論』のインドラが確信したいのは、シビ王がブッダを目指していることである。これに対して、『六度集經』のインドラが確信したいのは、サルヴァダッタ王がインドラ以外のものを目指していることである。

『大智度論』に登場するインドラは、王がブッダになる決心をしていることを疑いの余地なく納得したいと思っている。これはインドラが王を試す唯一の動機であり、すべてに優先される。そして、この点を入念に描こうとして、わざわざ「真実の陳述」が導入されて、いささか大仰とも言える場面が設定される。これと対称的に、『六度集經』に登場するインドラは、自分の地位を脅かそうとしているのではないことを納得できればよい。インドラになるつもりがないことが分かればそれでよいのであるから、ブッダになるつもりであることを華々しく証明する必要がなく、そのために大仰な場面を設定しなくてもよい。「真実の陳述」を導入しなくてもよく、手軽に「神力」が用いられるのである。

『マハーバーラタ』(mahābhārata) 第3巻131のウシーナラ王(uşīnara)の物語⁴⁷⁾は、仏教以前の伝承を受けたものであるから、王の目標は当然ながらブッダになることではない。そして、「真実の陳述」を用いることもない。それどころか、身体に回復の手順が話題になっていないのである。しかしながら、命の問題をめぐるインドラと王の間で交わされる論議は同じであり、「同じ重さの人肉による賠償」というモチーフが用いられる

点も同じである。シビ王物語の起源を考える上で、そして物語の二つの系列を考える上で、叙事詩の伝承を伝えるウシーナラ王の物語は⁴⁸⁾、極めて重要なものであるらしい。この点については、将来の研究で課題としてぜひ取り上げたい。

注

- 1) インドでシビ王の物語の伝承は仏教説話だけに限られていたわけではない。大叙事詩『マハーバーラタ』(mahābhārata) 第3巻131にも、インドラが鷹に化けて王を試す話が見られる(注47, 48参照)。
- 2) ヴェーダ時代のインドラは、最も人気のある神 (deva) であった。紀元前10世紀に溯ると言われる『リグ-ヴェーダ』(ṛg-veda) に収められている讃歌の三分の二は、インドラを称えるものである。インドラは雷(雷鳴+雷光)を武器として手に持ち、それを投げて山を破壊し、敵を片っ端から粉砕する。インドラはすべての神々の中で最も強い存在であった。

後代にヒンドゥイズムが成立すると、シヴァ (śiva) やヴィシュヌ (viṣṇu) が最高神になり、インドラが信仰の対象として人々に崇められることはなくなった。このように、神としての地位は低くなったけれども、神々の首領として神話の中で語られ続けた。ヒンドゥーの伝承の中で、インドラは神々の国の皇帝である。

神々を指揮するインドラは、仏教に採り入れられて、33の神々(三十三天)が住む天上の国の皇帝とされた。そして、神々を率いて戦い、ブッダが説いた真理を守護した。「力強い[者]」を意味する“śakra”はインドラの別名であるが、これが中国で「釋掲羅」[ʃiek-k'iei-la]と表記され、「天帝-釋掲羅」の省略形「帝釋」がよく使われる。

- 3) “毘首羯磨”[bii-ʃiəu-kiat-mua] (viśvakarman) という名前の意味は「すべてを作る者」である。これは建築と工芸を担当する神であり、神々のために家を建て者を作る。地上世界では、あらゆる種類の職人たちの守護神である。太陽がバードラパダ (bhādrapada) の星座に入る日に、工事が無事に進むことを祈願して、職人たちはヴィシュヴァカルマンに礼拝する。この日には一切の工具が使われない。

シビ王の物語に登場するインドラ

仏教の伝承で、ヴィシュヴァカルマンは「三十三天」に住み、インドラの命令を受けて、建築や彫刻に従事すると言われる。シビ王の話に登場するヴィシュヴァカルマンは、「巧變化師」(『大智度論』, p. 88)と紹介されている。

- 4) 『百喩經』 20, 『大正新脩大藏經』 4, pp. 545-546.

岩本裕訳, 『カターサリット・サーガラ』 27, 『世界文学大系』「インド集」, 東京, 1959, p. 355.

- 5) 『(新鐫)笑林廣記』, (清)遊戯主人纂輯, 粲然居士參訂, 寶仁堂, 乾隆二十六年刊, 北京, 九 貧客部, 「打半死」.

- 6) 孫普泰, 『朝鮮の民話』 16, 東京, 1925, pp. 248-249.

- 7) 関敬吾, 『日本昔話大成』 7, 東京, 1979, p. 291.

- 8) このモチーフを使った話を含む文献として重要なのは, 13世紀のラテン語教訓説話集『ゲスタ・ロマノールム』(Gesta Romanorum)であり, 1342年にイギリスで作られた写本が残っている。モチーフの「人肉による賠償」は, その195話に見られる(伊藤正義, 『ゲスタ・ロマノールム』, 東京, 1988, p. 789: 195 注; pp. 781-788: 195 「人肉の抵当」)。

- 9) ウィリアム・シェイクスピア著, 中野好夫訳 『ヴェニスの商人』, 東京, 1973, pp. 7-176.

Geoffrey Bullough, Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare, Vol. 1, London & New York, 1957, p. 448.

もっとも, ここで挙げられているのは『マハーバーラタ』第3巻131の伝える話だけであり, 多様な仏教説話には言及がない。

- 10) 荒木博之/石原綏訳, S. トンプソン『民間説話』上, 東京, 1977, p. 171.

- 11) 鳩摩羅什(譯), 『大智度論』, 『大正新脩大藏經』 25, pp. 87-88.

- 12) 鳩摩羅什(kumārajīva 344-413)はクチャ(龜茲/kuca)に生まれ, 父はインド人であり, 母はクチャ国王の妹であった。9歳の時に母に連れられてインドのカシミール(罽賓/kaśmīra)に留学した。382年(建元十八年)にクチャは前秦に攻撃され, クマーラジーヴァは涼州へ連れて行かれた。後秦の弘始三年に桃興に迎えられて長安へ行き国師となる。『法華經』や『大智度論』など35部294巻を訳したと言われる。『大智度論』はナーガールジュナ(nāgārjuna/龍樹)の著と伝えられるが, 中国で作られたらしく, クマーラ

ジーヴァ自身が編纂したものかも知れない。

- 13) “波羅蜜”はサンスクリットの“pāramitā”を漢字で表記したものであり、「ブツダになるために欠かせない実践項目」を指す。“pāram-i-tā”は「向こう岸 (pāra) へ行くこと」を意味する抽象名詞であるが、仏教の術語としては「向こう岸 (迷いのない世界) へ行く方法」を指す (小林信彦, 「兎が火に飛び込む話の日本版」, 『国際文化論集』 30, pp. 41-41)。「ブツダになるために欠かせない実践項目」を教えたのは、ブツダを目指す人々 (菩薩/bodhisattva) を励ますのに効果があるという (『大智度論』, p. 58, a)。

6種の実践項目 (ṣaṭ-pāramitā/六-波羅蜜) うち, ②「戒めを守り正しい生活態度をとること」⑤「精神を集中すること」および⑥「最高度の洞察力を身につけること」の3種は, 古い時代から仏教で重んじられていた。大乘 (mahāyāna) が唱えられるようになってから追加されたのは, ①「物を与えること」, ③「不当な仕打ちに我慢すること」, ④「苦難にめげず善い行為に励むこと」の3項目であった。これはいずれも, 他人の存在を前提にしたものである (小林, loc. cit.)。

- 14) 康僧會 (譯), 『六度集經』, 『大正新脩大藏經』 3, pp. 1-52.

15) *ibid.*, p. 1, a.

- 16) この『六度集經』 卷第一から卷第三まで収められているのは, 第1話のパラミターである「与えること」(布施) の例話であり, 全部で26話ある。そして, その第2話で取り上げられているのが, サルヴァダッタ (薩婆達) である。第4から第8までに割り当てられてた項目とその数は次の通りである。

卷4 「戒めを守って正しい生活態度をとること」(持戒)	15
卷5 「耐えること」(忍辱)	13
卷6 「励むこと」(精進)	19
卷7 「精神を集中すること」(禪定)	9
卷8 「最高度の洞察力を身につけること」(明)	9

- 17) 鳩摩羅什 (譯), 『大莊嚴論經』, 『大正新脩大藏經』 4, pp. 321-323.

18) 『大智度論』, p. 88: 時世無佛 釋提桓因命盡欲墮 自念言 何處有佛一切智人 處處問難不能斷疑 知盡非佛 卽還天上愁憂而座

- 19) *loc. cit.*: 毘首羯磨天答曰 是優尸那種尸毘王 持戒精進大慈大悲禪定知慧不

シビ王の物語に登場するインドラ

久作佛

- 20) loc. cit.: 釋提桓因語毘首羯磨 當往試之知有菩薩相不
- 21) 『六度集經』, p. 1: 帝命邊王曰 今彼人王慈潤霽霈福德巍巍 恐于志求奪吾帝位
- 22) loc. cit.: 人王曰 吾不志天帝釋及飛行皇帝之位 吾觀衆生没于盲冥 不觀三尊不聞佛教 恣心于凶禍之行 投身于無撰之獄 觀斯愚惑 爲之惻愴 誓願求佛 拔濟衆生之困厄令得泥洹
- 23) 『大智度論』, p. 88: 毘首羯磨即自變身作一赤眼赤足鵠 釋提桓因自變身作一鷹 急飛逐鵠
- 24) loc. cit.: 鵠直來入王腋底 舉身戰怖動眼促聲
- 25) loc. cit.: 是時鷹在近樹上 語尸毘王 還與我鳩此我所受
- 26) loc. cit.: 王時語鷹 我前受此非是汝受
- 27) loc. cit.: 我初發意時 受此一切衆生皆欲度之
- 28) loc. cit.: 鷹言 王欲度一切衆生 我非一切耶 何以獨不見愍 而奪我今日食
- 29) loc. cit.: [王言] 汝須何食亦當相給
- 30) loc. cit.: 鷹言 我須新殺熟肉
- 31) loc. cit.: [王]呼人持刀自割股肉與鷹
- 32) loc. cit.: 鷹語王言 王雖以熟肉與我 當用道理令肉輕重得與鵠等 勿見欺也
- 33) loc. cit.: 王言 持稱來
- 34) loc. cit.: 是時菩薩 以血塗手攀稱欲上 定心以身盡以對鵠
- 35) 『大莊嚴論經』, p. 322: 爾時大王不惜身命即登秤上 時諸大地六種振動 猶如草葉隨波震蕩 諸天空中歎未曾有 唱言 善哉善哉 眞名精進志心堅固
- 36) 『六度集經』, p. 1: 帝釋邊王稽首于地曰 大王欲何志尚惱苦若茲
- 37) 『大莊嚴論經』, p. 333: 爾時化鷹歎未曾有 彼心堅實不久成佛
- 38) loc. cit.: 爾時帝釋問彼王言 爲於一鵠能捨是身不憂惱耶
- 39) 『大智度論』, p. 88: 是時菩薩作實誓願 我割肉血流不瞋不惱 一心不悶以求佛道者 我身當即平復如故 即出語時身復如本
- 40) 石橋優子, 「仏教文学に見られる『眞実の陳述』(satya-vacana)」, 『仏教文学』21, 1997, pp. 1-13.
- 41) 『六度集經』, loc. cit.: 王曰 使吾身瘡愈復如舊 令吾志尚布施濟衆行高踰今
- 42) loc. cit.: 天帝即使天醫神藥傳身 瘡愈色力踰前 身瘡斯須豁然都愈

- 43) loc. cit.: 天帝驚曰 愚謂大王欲奪吾位 故相擾耳
- 44) 慧覺 (譯), 『賢愚經』, 『大正新脩大藏經』 4, pp. 351-352.
- 45) 紹徳 (譯), 『菩薩本生鬘經』, 『大正新脩大藏經』 3, pp. 333-334.
- 46) 『大智度論』, p. 88: 毘首羯磨天語釋提桓因言 天主汝有神力 可令此王身得平復 釋提桓因言 不須我也 此王自作誓願大心歡喜 不惜身命感發一切令求佛道 帝釋語人王言 汝割肉辛苦心不惱沒耶 王言 我心歡喜不惱不沒 帝釋言 誰當信汝心不沒者
- 47) 上村勝彦訳, 『マハーバーラタ』 3, 東京, 2002, pp. 364-367.
- 48) ウシーナラの物語では, インドラに協力して鳩に化けるのは火の神アグニ (agni) である。叙事詩の伝承で, アグニには来客を守る役割がある (E. Washburn Hopkins, *Epic Mythology*, Strassburg, 1915, pp. 103-104)。鳩は人々を脅かす鳥であり, 死の使いと見なされることさえある (ibid., p. 20)。ウシーナラの物語では, 来客の守護者アグニが正体を隠して, 嫌がられる鳩に姿を変える。忌み嫌われる鳩を歓迎するウシーナラは, 分け隔てなく命を懸けて全ての者を守る王として, その比類のない道義 (dharma) が絶賛されるのである。
- なお, 『マハーバーラタ』第3巻131に見える王の名前 “uśīnara” は, 『大智度論』で “優尸那” [iəu-ʃi-na] と表記されて, シビ王の「種」として挙げられている (『大智度論』, p. 88: 是優尸那種尸毘王)。

Indra Who Appears in the Story of Śibi

HÓU Qiǎo Hóng

King Śibi is crazy about ‘giving things to others’ (布施), and Indra, the emperor of gods in Heaven, wants to know his intention. So he takes the shape of a hawk and his vassal takes the shape of a dove. Pursued by the hawk, the dove flies into the armpit of King Śibi to seek his protection. The hawk demands return of his prey, but King Śibi refuses, saying that it is his duty to protect all living beings. The hawk retorts that he is also a living being and needs flesh to live.

Thereupon King Śibi proposes to offer his own flesh. The hawk accepts the proposal on condition that the flesh which he gets from King Śibi should be equal in weight to that of the dove. A scale is brought in and the dove is put on one side of it. King Śibi takes a portion of flesh from his own thigh and puts it on the other side of the scale. But the scale does not balance. Although he repeatedly adds his flesh, the scale is always inclined towards the side of the dove. Finally King Śibi puts his whole bloodstained body on the scale. Seeing that his ‘act of giving’ has reached the ultimate level, the hawk is at last convinced that King Śibi earnestly wishes to become a buddha. The hawk and the dove resume their proper forms and return to Heaven. This is the story of Śibi as found in the *Dà-zhì-dù-lùn* (大智度論) of Kumārajīva (鳩摩羅什 344-413).

In China this story has been handed down in many variants, among which one is worthy of special attention. It is the story as told in the *Liù-dù-jī-jīng* (六度集經). Indra who appears there is very unique in his motive for testing a king called “Sarvadatta.” This Indra is anxious about his own future and

apprehensive that the king may aim at becoming Indra. If the king becomes another Indra, the present one has to lose his position. As the king has fortunately proved his wish to become a buddha, Indra feels relieved and returns to Heaven together with his vassal.